

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01268

研究課題名（和文）Dvandva型等位複合語の比較・対照研究

研究課題名（英文）Research on dvandvas from cross-linguistic viewpoints

研究代表者

島田 雅晴（Shimada, Masaharu）

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：30254890

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は等位複合語と呼ばれる言語形式を理論言語学の観点から説明しようとしたものである。等位複合語には、要素と要素を組み合わせる「複合」という概念と「等位構造」という概念の両方が関わっており、どちらも理論言語学にとっては説明を要する重要な概念である。本研究では、等位複合語を英語、日本語といった特定の言語や名詞、動詞といった特定の品詞ではなく、より普遍文法を意識した分析を行うことにより、記述と理論の両面で成果を上げた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は等位複合語を対象にした言語間比較を行い、複合語の構造と等位表現の構造を研究したものである。等位表現の構造は統語論において長く議論的であったが、等位複合語という語も対象にすることにより、句と語の違い、品詞の違いを超えた一般的な観点から等位構造について提案を行った点が学術的意義となる。また、データにはレシビティブ等、日常的に創造されるものも含まれ、言語学を社会に身近なものとして紹介した点も重要な点である。

研究成果の概要（英文）：We obtained several research results worth mentioning. Firstly, we have clearly made a morphological and semantic distinction between coordinate compounds of appositive type like "singer-songwriter" and those of dvandva type like "Budapest" from a contrastive-linguistic point of view. It has been often pointed out that dvandvas are productive in Japanese, but not in English. However, we found that they prevail even in English with a coordinator "and," utilized as a linker. Secondly, a morphosyntactic structure of dvandvas was identified on the basis of ideas on phrasal structures of coordinations developed in the literature. A coordination structure is a matter of debate in syntactic theorizing and we made a unique contribution to this issue with dvandvas. Thirdly, we made a diachronic investigation concerning dvandvas in OE and ME. For instance, a combination of constituents forming dvandvas was considered in terms of prosody.

研究分野：形態統語論

キーワード：語形成 生成文法 英語史 言語比較

## 1. 研究開始当初の背景

生成言語学においては、言語は表面的な語順というよりは目に見えない階層構造にその本質があるとされ、20世紀半ばから普遍文法の研究が進められてきた。本研究開始当初はChomsky (2013)に端を発し、「ラベル付け理論」により階層構造の構築に関する研究が始まっていた。いくつかの構造については興味深い理論的問題を含んでいたが、等位表現の構造の特定もその中の一つであり、しかも等位構造は生成言語学初期からの研究課題であった。

等位表現の中でも統語論研究では伝統的に等位接続詞を含んだ「等位句」が議論の中心であったが、これとは対照的に形態論分野においては、古くから「dvandva 型等位複合語(以降、「dvandva」と表記)」に代表される等位複合語と呼ばれる、構成要素が等位関係を持つ複合語を研究の対象としてきた。近年はBauer (2008)の体系的かつ包括的な記述研究で等位複合語に対してさらなる研究の進展が期待される状況にある。

このように、句を扱う統語論側でも語を扱う形態論側でも等位表現は主要な研究テーマであるが、語と句に連続性を認める立場の形態論、統語論の考え方を採用するとすれば、両者は区別なくとらえられるべきであり、等位構造全体を一般性のある理論から説明する必要性が生じている。また、等位表現は、特に、形態論においては、言語間による違いが大きいとも観察されており、言語の普遍性と多様性を扱う生成言語学の観点からの研究が求められる。近年では、言語の多様性は抽象的な形態統語構造を聴覚上あるいは視覚上具現化する「外在化(externalization)」の問題とされ、重要な研究テーマとなっている。

## 2. 研究の目的

上記1に述べた背景を踏まえると、本研究の目的は dvandva をデータとして等位表現の形態統語構造をラベル付け理論を援用しながら特定すること、dvandva の生起条件を通言語的に調べ、当該言語での dvandva の有無は何に起因するのかを解明することの2点となる。

dvandva とは、日本語の「手足」のような表現のことである。これは、「手と足」というように読み替えが可能な、それぞれの構成要素が等位の関係になっている複合語である。句の等位表現を対象にして構造を論じた統語論的研究はあるが、語の等位表現を対象にして構造を論じた携帯統語論的研究はあまりない。句、語といった区別なく考えることで、等位表現の構造についてどのような結論が導けるかを模索するのが本研究の1つ目の目的である。理想的には、句も語も区別なく、等位構造一般に成り立つ分析を提案することである。

また、先行研究によれば、世界の言語は dvandva が生産的な言語とそうでない言語に2分される。日本語は dvandva が生産的な言語であるが、例えば、英語は日本語の「手足」に相当する「hand leg」というような表現はない。つまり、「hand leg」は dvandva としては不適合である。このことからわかるように、英語は dvandva が基本的に不可能な言語である。この言語間の違いは何に起因するのかを解明することが2つ目の研究目的である。dvandva の生産性が言語ごとに異なるのは、言語ごとに dvandva の形態統語構造の容認可能性が異なるのか、外在化の規則が異なるからなのか、2つの可能性が存在するが、後者の可能性を追求する。

## 3. 研究の方法

Bauer (2008)による等位複合語の分類を出発点として、等位複合語を通言語的に観察することから始める。Bauer は等位複合語を5種類に分類し、dvandva はそのうちの1つである。そして、dvandva も5種類に分類されている。できるだけ多くの言語を対象にして、等位複合語、その中でも dvandva の存在やその種類を特定することを試みる。

対象言語には過去の言語も含める。具体的には、古英語、中英語、近代英語で、共時的な比較だけでなく、通時的な比較も行い、データを収集する。データの収集の仕方としては、文献調査だけでなく、*Oxford English Dictionary* などの大型辞書、インターネットサイト、コーパスも利用し、できるだけ多くのデータから一般化を試みる。

分析の提案のために、先行研究の文献を調査し、これまでの知見をまとめる。先にも述べたように、先行研究では句の等位表現を統語的に扱ったものが多い。等位複合語のデータも加味して、有力な案を策定する。特に、ラベル付け理論を援用した案を検討する。

## 4. 研究成果

(1) Bauer (2008)による分類を批判的に検討し、独自の分類を提案した。「親と子」、「善と悪」、「魚と貝」などのように「と」を使って書きかえられる「親子」、「善悪」、「魚貝」といった語とそれが不可能な「児童」、「河川」、「火災」のような語が Bauer (2008)では dvandva に属するものとして記述されていたが、これらを明確に区別した点が重要である。前者を「ト型 dvandva」、後者を Bauer の用語をそのまま用いて「co-synonymic 型 dvandva」と呼ぶことにした。

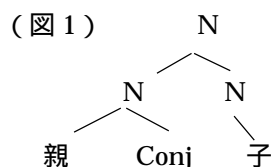
(2) dvandva とは異なる等位複合語の中には、「シンガーソングライター」、「公務員ランナー」

のように、「シンガーでソングライター」、「公務員でランナー」というように、「で」で書きかえられるものがあり、このタイプを「デ型等位複合語」と呼んで位置づけをはっきりとさせた。この分類整理を進める中で、必ずしも名詞からなる等位複合語だけに「ト型 dvandva」と「デ型等位複合語」の区別があるわけではないのではないかという知見に至った。等位複合語の分析には範疇を超えた視点が必要であることがわかり、新たな研究テーマが発掘につながった。

(3) 従来から現代英語では dvandva が生産的ではないという指摘がされてきたが、古英語や中英語においては co-synonymic 型の dvandva はかなり生産的であることが判明した。このことは、ト型 dvandva と co-synonymic 型 dvandva には異なる形態統語分析が必要であることがわかり、後者は形態素の多重具現という現象の 1 つである可能性が検討された。

(4) 英語には「father and mother」、「body and soul」、「fish and chips」、「bread and butter」というバイノミアルという表現が豊富で、これがト型 dvandva に相当すると結論付けた。つまり、従来の見解とは異なり、英語でもト型 dvandva が存在するということになる。また、古英語、中英語でのバイノミアルの構成には韻律も関わっていることが観察された。

(5) dvandva 型複合語の構造について、上記の知見に沿った案が提案されている。具体的には、構成語に加えて Conj という機能範疇を含んだ構造を仮定する。「親子」を例にして、以下におおまかな構造を示す。



この構造の注目すべき点は、「親」と「子」が直接結びついているのではないところである。Conj という機能範疇が「親」と「子」という 2 つの構成語を 1 語にまとめあげているのである。ただ、この Conj は日本語では音形を持たないが、英語では「and」で具現し、バイノミアルと呼ばれる表現形を生む。Conj がどのように音韻具現するかは、その言語の形態論が拘束形優位か自由形優位かに相関しており、それがこの構造の外在化規則を左右すると考えられる。このような機能範疇を想定することで、日英語にみられる dvandva に関しての言語間差異を機能語の音韻具現に帰すことになる。

(6) dvandva のデータを収集する中で、dvandva が創造的に新規につかられている現状についても確認できた。例えば、創作料理のタイトルやパンの商品名などによく出てくることがわかった。また、和製英語でもこのような例が観察され、信号機を意味する「ゴー・ストップ」などがそれにあたる。これは英語の誤用ではなく、日本語の dvandva に英語からの借用語がつかわれている例であり、言語接触研究を理論言語学の観点から行う必要性を示したものである。また、これらのデータは日常的な言語使用でみられるものであり、言語学を社会に還元する際の材料になるという点で意義がある。

#### < 引用文献 >

Bauer, Laurie (2008) "Dvandvas," *Word Structure* 1, 1-20.

Chomsky, Noam (2013) "Problems of Projection," *Lingua* 130, 33-49.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>Akiko Nagano  | 4. 巻<br>なし            |
| 2. 論文標題<br>43 Japanese  | 5. 発行年<br>2024年       |
| 3. 雑誌名<br>Onomatopoeia in the World's Languages: A Comparative Handbook | 6. 最初と最後の頁<br>513~526 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.1515/9783111053226-043                    | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                                  | 国際共著<br>-             |

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>Yuichi Ono   | 4. 巻<br>40            |
| 2. 論文標題<br>How to Measure Implicit Knowledge: Methodological Issues in the Second Language Acquisition Research. | 5. 発行年<br>2022年       |
| 3. 雑誌名<br>Tsukuba English Studies  | 6. 最初と最後の頁<br>299-315 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし  | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難   | 国際共著<br>-             |

|  |                    |
|--|--------------------|
| 1. 著者名<br>Akiko Nagano                               | 4. 巻<br>4          |
| 2. 論文標題<br>Word borrowing in theoretical linguistics | 5. 発行年<br>2021年    |
| 3. 雑誌名<br>Data Science in Collaboration              | 6. 最初と最後の頁<br>8-16 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                        | 査読の有無<br>無         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難               | 国際共著<br>-          |

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>小野雄一                                    | 4. 巻<br>27            |
| 2. 論文標題<br>レシビタイトルに現れる借用語withの特徴:随伴用法と等位接続表現に着目して | 5. 発行年<br>2021年       |
| 3. 雑誌名<br>言語処理学会 年次大会発表論文集                        | 6. 最初と最後の頁<br>702-705 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                     | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）             | 国際共著<br>-             |

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 7件）

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>Akiko Nagano, Masaharu Shimada   |
| 2. 発表標題<br>Co-synonymic dvandva compounding: Its historical change and cross-linguistic variation |
| 3. 学会等名<br>The 13th International Conference on Historical Lexicography and Lexicology (国際学会)     |
| 4. 発表年<br>2023年   |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>長野明子                           |
| 2. 発表標題<br>Dvandva 型等位複合語の生産性についての第 3 の仮説 |
| 3. 学会等名<br>近代英語協会                         |
| 4. 発表年<br>2023年                           |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>Akiko Nagano, Masaharu Shimada   |
| 2. 発表標題<br>Analogical rule extension underlying novel requisitive imperatives in web Japanese |
| 3. 学会等名<br>The 20th International Morphology Meeting (IMM) (国際学会)                             |
| 4. 発表年<br>2022年   |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>Akiko Nagano, Masaharu Shimada  |
| 2. 発表標題<br>Verum, focus, and Hichiku Japanese sentence-final particles               |
| 3. 学会等名<br>The 55th annual meeting of the Societas Linguistica Europaea (SLE) (国際学会) |
| 4. 発表年<br>2022年  |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>Kasumi Takahashi, Yuichi Ono  |
| 2. 発表標題<br>Acquisition of the English Subject by Japanese Learners of English: Obligatoriness of the subject and its interpretive property |
| 3. 学会等名<br>The Pan-Pacific Association of Applied Linguistics (PAAL) 2022 (国際学会)   |
| 4. 発表年<br>2022年  |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>Akiko Nagano, Masaharu Shimada  |
| 2. 発表標題<br>Contrastive approach to dvandva compounding in language contact                 |
| 3. 学会等名<br>The 15th ESSE conference (the European Society for the Study of English) (国際学会) |
| 4. 発表年<br>2021年  |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>Akiko Nagano   |
| 2. 発表標題<br>On property concept constructions in English derivational morphology |
| 3. 学会等名<br>The 5th American International Morphology Meeting (国際学会)             |
| 4. 発表年<br>2021年   |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>Makiko Mukai, Masaharu Shimada  |
| 2. 発表標題<br>Reduplication and compounding with mimetic roots                              |
| 3. 学会等名<br>The 2021 annual meeting of the Linguistic Association of Great Britain (国際学会) |
| 4. 発表年<br>2021年  |

|                                     |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>島田雅晴・長野明子・小野雄一           |
| 2. 発表標題<br>レシビタイトルにおける接続詞「と」の用法     |
| 3. 学会等名<br>国立情報学研究所IDRユーザーフォーラム2020 |
| 4. 発表年<br>2020年                     |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>長野明子                                   |
| 2. 発表標題<br>形態理論と語彙比較                              |
| 3. 学会等名<br>Data Science in Collaboration 4 (招待講演) |
| 4. 発表年<br>2020年                                   |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>小野雄一                                   |
| 2. 発表標題<br>レシビタイトルに現れる借用語withの特徴:随伴用法と等位接続表現に着目して |
| 3. 学会等名<br>言語処理学会                                 |
| 4. 発表年<br>2021年                                   |

〔図書〕 計5件

|                            |                 |
|----------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>米倉 綽、長野 明子、島田 雅晴 | 4. 発行年<br>2023年 |
| 2. 出版社<br>開拓社              | 5. 総ページ数<br>288 |
| 3. 書名<br>英語と日本語における等位複合語   |                 |

|                                   |                 |
|-----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>廣瀬 幸生、島田 雅晴、和田 尚明、長野 明子 | 4. 発行年<br>2022年 |
| 2. 出版社<br>開拓社                     | 5. 総ページ数<br>336 |
| 3. 書名<br>比較・対照言語研究の新たな展開          |                 |

|   |                 |
|---|-----------------|
| 1. 著者名<br>西原 哲雄、都田 青子、中村 浩一郎、米倉 よう子、田中 真一、西原 哲雄、西原 哲雄、島田 雅晴、時崎 久夫、由本 陽子、西山 國雄 | 4. 発行年<br>2021年 |
| 2. 出版社<br>開拓社   | 5. 総ページ数<br>212 |
| 3. 書名<br>形態論と言語学諸分野とのインターフェイス   |                 |

|   |                 |
|---|-----------------|
| 1. 著者名<br>大津 由紀雄、今西 典子、池内 正幸、水光 雅則、杉崎 鉦司、稲田 俊一郎、磯部 美和 | 4. 発行年<br>2022年 |
| 2. 出版社<br>研究社   | 5. 総ページ数<br>368 |
| 3. 書名<br>言語研究の世界                                      |                 |

|   |                 |
|---|-----------------|
| 1. 著者名<br>Giuliana Giusti, Vincenzo Nicolo Di Caro, Daniel Ross   | 4. 発行年<br>2022年 |
| 2. 出版社<br>John Benjamins Publishing Company                       | 5. 総ページ数<br>342 |
| 3. 書名<br>Pseudo-Coordination and Multiple Agreement Constructions |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-



6. 研究組織

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                     | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)                     | 備考 |
|-------|---|---|----|
| 研究分担者 | 長野 明子<br><br>(Nagano Akiko)<br><br>(90407883) | 静岡県立大学・国際関係学研究所・教授<br><br><br><br>(23803) |    |
| 研究分担者 | 小野 雄一<br><br>(Ono Yuichi)<br><br>(70280352)   | 筑波大学・人文社会系・教授<br><br><br><br>(12102)      |    |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|         |         |